085933-001-1

911.1351-M893kk

古今集遠鏡

本居　宣長／著

M8

DBD-0533

国立国会
25.3.31
図書館
112439

を読序
このを読ちおのもとやくちとひ
師のことのしてなのへ
しるの注釈のようにあ
つそいおふくしくにちしおをて
くちのそ仏方永書の名のあひのこく
ちく仏をそいをきのるの世のてろぬのに
その茶仏いの世のつの人のこのこ仏むお

せをくみてそしるものをやくらむ
神ならぬ身なれば
その人のえらび定めん
うえのよ代とおくせをとつ
その柚松のえだをおふ
しもふるまでかくいふ

古今集遠境

をはりのこともとゝのはでを

うゐをはりみのりもみぢ紫

此書、古今集よりのちの小歌集にして、俗語（サトビコト）小諢（ウワ）せ

ものゝまゝにてのこれるぬしもおほくさいはひ

ものゝまゝにてのこれるぬしもおほくさいはひ

きこゝろのかぎりをつくしてよめるうたどもなれば

先しもとうねをそのふちの里人のはなやかなるよりは

くゝえもつるふさしてかほいろにひまもむすび給のまゝなれば

ぬーよそやくらちひもゝ先ゝもてこてこをぢふてそでめりうを袋き
てい有りねうなふまてくいう回おくく事志ぶきふうちちうにまて。
えーとそそきびあ回さ代手めう代、いうふくとこぢくおどろうさる
面ふおおろに思ひおこてこてみうくおーつ代ふ代神代のまた
きとも代ぜぬーの神ぎこふーをおーうたのこはをむしやうに。
志ろうごけともぶ〳〵もろべうそれぢ伝のふや添くまあおうて
ろぎーふみれー少れ神とおしふ。
○うひまおびまどのうねふをちくくいうふそくとそこと
ふもおのおぐうひを甘ーかしとん乃かうぬはまふむやう
うて河のいきひてふをはのそこあおう孤ふなどこあおう孤ふう

とぶもちハまろく指のおるやうふ法てみせそう
むぎぶそふくふつぶきふおーてきをみも人ぶて
の耳ハ代ふのーねをびちくてそるえけまきふハ花ふべくも
あ〳〵ぎやふ代ふをめかみとうてるおのなーてうーふるに
そいうふとかきもねさ回ーねまでぶてもふうつきて枝さ
ーおもねみぐうきてうきうをねまそのこころ回なくえ
えをまて彩近きをおうち本ふてよおきをぢ先もなーばうねかり
ふてやふおーびや今ハをき代乃えんぶん
をやをくちうく。よ緑の色ふうつーてこのめが糸
のあとひふうれてーむおをやかくそ此事ハきとし尾法の横井ふ杖

○俗語(サトビゴト)もちろんくしよあるやうに。又はいのいよ先きこゝろをおぐくべし。又ちうちうとをこゝろのあびあるを。ふなぐあめ出こゝろ抱なるべ。そのうちとをこゝろ祖して澤(ウツ)そぐこゝろ。ふたのすゐひ出こゝろおまそこし。よくけこゝろべでかし。又男女(ナンニョ)とをこゝろの祖をこゝろうちこゝろ。あこゝろ多くて。ふけくけこゝろものかれば。寺のいきおひふようかなへこゝろおやれ私をこゝろをもたくべきなり。又いそゆるかこゝろをこゝろとをこゝろ。そくこゝろとをこゝろ。そぐきてこゝろとをこゝろ。ワタシとワレともいひ。

てハ。行(ゆく)ゆくゆをそ祖(ふ)こゝろ。今おのがんふるよがごハ。さしてとえぐこゝろ抱あるをこゝろ。さゝびごゝろ小澤(ウツ)こゝろハごふみづこゝろ。さるよかをとくて。物の味をこゝろ。こづこゝろかそてもまるがごくく。いゆ一へ乃雅言(ミヤビゴト)これ。おのがそこゝろ内のおとこゝろなまてバこゝろこと。ようおこゝろくんでへのこよおくこゝろ。ゆこゝろかふそこゝろほこゝろとおやきごかこゝろ。俗(サトビゴト)ごハかのおこの里こゝろおくこゝろかこゝろきこゝろもこゝろをごとこゝろ。かこゝろみやをごこゝろ。ふちうきこゝろもこゝろをごとこゝろ。かこゝろれこゝろかるようはおこゝろごこゝろ。なこゝろもくこゝろも。にそこゝろこゝろ。かこゝろをバこゝろかこゝろ。ふとり男ひごこゝろ。大こゝろこハ永こゝろ。その祖こゝろ。うこゝろそべきこゝろぎこゝろ。そそこゝろ。なべくいとこゝろとがこゝろ。

ワシハといふごき。ワシ。それだをスルヤといふごび。又そのやうなのやうなるをソンナコンナといふごび。てナラタラさ〳〵て。ソンヨカロとやうにいふごび。こゝにうつくしくちかくなりてゐるをいふ。○そべてんの法はじくいふともひごの浅きことをかゝくことをいふ。でふうち歩く執る物を落しその泡のやうにはいひさゐいきやひ〳〵と多く小首かきごとでいふ。みんなのかをおしそろえて。そのいきをひとつに揃(ソロ)て〳〵さ〳〵ごび。

さゝごバ甚一ツ小まりさく〳〵と。といてるせごろ。揃(ソロ)のそてろ〳〵へ〳〵くと。笹(ササ)の葉ごてるかごき。ふおのがつゐしさゝみもふいはうで。此下句れ。ゐごふまでいてる泡のうごをふをへ〳〵さごバ。泡のやうに細くちひさくなりてゐるをいふ。又ごきとでいふ

つゝもおくりかへり又々上下乃淫(ウツシ)の淫のゆふべまでこゝもとゝもにうちあるいて二句に会せてそのもとべてはてゝおもしろがりてやとうつ(ウツ)りぬ扨あくる日もまたおなじごとくにしてもうつもそべき俗をもとめんとおもひしかどもとかくするうちに一つもなく弁ナラバ一向二初カラサカヌガヨイニテゼサカズ六年ヌゾ・と淫(ウツ)をうつごとし

○ゑのかりてもやその淫のうつぎうつ(ウツ)ぎうつてゆくの淫(ウツ)をえて淫(ウツ)べきうつ(ウツ)りとやの淫つぎてふをえなどゝかくまもなくてい(ゐ)ゝりてうつ(ウツ)されとかうとくおもうつ(ウツ)ることもなくてやいそもしとやいそもしなどゝ句をまつゝべ去年トニカワ今年トイウカし淫(ウツ)をべきとゝもにて俗をもとめんとうごとし去年トニタモノデアラウカ

今年トニタモノデアラウカとうつ(ウツ)をそゝくりかへるゝ又去年ことゝ句をうつ(ウツ)すとし淫(ウツ)さでは叶ばあるまじくとおもひわもどと此句を来タといふあひわもどと此句の来るハ来ぬることゝもべきことおもひさらひゞゝ死なゝいふことをそのころをえてキタと淫(ウツ)をべきもかゝるとゝびおもしろくあるわしなどゝへてさゝかゑし

○句をうつてうつをぎけりゑとこえてわぎはえていゐ俗をいふ見てといふそゝもバ花チヤト見ウテと淫(ウツ)をべしとゝもによべのあてもつゝいゐ俗をもとめてこゝふとゝもにうちあるいてイフとゝいへゝ維義ヲニテ居ルトイへと淫(ウツ)をべしみてふをえなどゝかくまもなくてゝのことゝもバまちガキタワイとゝがふゝ此ゑ多しゝ又てふをほを淫べ

112439

きこと也。「花咲ふりもるごい」花が咲タワイと。ガをそゝぶまれハなお多しそべて。俗云ふハガ〳〵ふ〳〵このをきさ。雅云のでをも。をくハガといへり。「花ろき里ゐるごい」花ノナイ里と。ノをそふ。又そゞきて。澤そべきもの。「人しれぬ」人しれぬまてをゆくもるごのこゝりじをもゞ。ウツヽヨバ澤云ばあてゝい。并〳〵にてこゝろし。

○祖のとゝ〳〵ほをおきう〳〵てうつそべきこと。おろそとやかく。山郭公ゐるごい。郭云ハ郭上へうつて。郭公ハ郭リオホウと。フテアノヤウニ呵カと澤し。「ろゝきへえよとてゝ」月新ヲヨルマデえヨトテ月ノ新カテラスとうつし。「ちゝきてゝ」ねを。ほふこゝろのゐるごい。ろを上ふうつして。コノゴロハイロ〳〵トあるヒノシゲイ「カナ」澤ゝ。「うゝきゝ」うゝきゝとこえ〳〵ゝこゝろをかるハゝこゝろを上へうたゝてえワタシタイトコロガキツウマア物サビシウえエルゝカナと澤ゝこゞひおてこれ

雅ヒコト俗ヒコト云し。いやうなものどひし。又てふをそもゝこゝろをかへ〳〵澤をべきなり。ものうかる○ふ号そ。ウ澤ゝ。ものうかるごいふ。上ふあるべきことをかれどもさいふひごゝ。ことのうかるまふそゝ。そゝとをゝこゝろをえて。澤そべきし。此仍多ゝ。時ゐそゝぬべし。

○てふをそもゝこゝろをかへ〳〵澤をべき。ねるのごゝ。ゐふカを入そるごいふ。俗云ふハ花ごといひて。ゝゐふカをそて。いきものひゝて。雅ハのごゝをふまつゝゐるを。志ろにふいふいきものひゝおにハ志ろべくもるゝごれバ。今ハサとの小辞を添へて。ごふあゝ。花がサ昔ノゝゝ〳〵澤をべきもの。ゝそふひごゐ大ゝ二つ。ゐる中ふ。「花ゝちゝきゐ」花ゝちゝきゐ。ゐるごやうふむゝへていゐるゐるふきゝびおゝ

もはじくとそういう。今一つ「風おこしてみるべらぼう」雪とのことで
花はちるちるめるごのさびろとそういうつもりできゐるよ。そもはぞふいてちる
をれだそのほかはなり。「風ふぞそし。雪とのことでそし。むふいく
ぎくはさごひとつちるさびさ。さるをとのていさうはきらめをもわう
むしをもバ井にうとくれることし。「雪やどの物ぞと」雪も
カ花ガオソイノカと澤をさびちるよ。マアバやうでんとの物ぞと花
○んそ俗をふはさべて皆ウとういふ。「雪イカウといふおも。
なんゆんを。ヲイカウといふおも。

をんなんなどのんもはじ「花やちりをんい。花ガチルデアラウカ。「花やち
るなんを。花ガチルデアラウカと澤はさて。チツタデとういふて。チルデとういふて
のうをとばもて。をんとなんとの定ぢ先をさきるべし。さて又俗のつで
きるおうちふあるんをそをくいうつしがさしるとをんんよ。
ちりおんばそちるんかせおるごのさびん人へつづきなへつづき。かせん
ばきてしんいばなちちふ。此おバ俗をうバんふんん人バチツテ後ニ。
チルかせノとやうふいひて。えヤウん人バチルデアラウん後ニチルデアラウんかせノおごバ
いをさるんばふ此おをを。ちひてんちんらんの雪ん成。ふ澤さそと
なるバ。おるんばで。オツケチルデアラウガソ夜夕後ニサし澤し。ちちるんお
せのを。サダメテムゴロバ萩ノ花ガチルデアラウんガをせノとやうふ澤をべし。此

まどと・俗にふさいでさえぎれば・はげしくふうとて・はどおとがしく・きたかぜ
かなでらん山乃梢をおどし・山ノ様ガ辰ガカクシテアルデアラウニ・と澤して
まるしく・又うなりそうな人をうんよおどしても・こんやうに人をうんよおどし
みてかるこうと・ふみさえたりてしかくやうふもうつをし
○らんの澤いくさくなり・まるで山ふの風やとくらんなどい・風ガトカスデ
アラウカと澤をアラウらんふあるより・カ上のやふあれり・いつの今ふう
つろひぬらんなどい・イツヒマニ変テニシマウタトヤラくと澤をヤラらんふあるねと・人ふうて
まねなやさくらんなどい・人ニシラサヌ気ガ咲タカシラヌと澤をカシラヌやとらんとに
あてより・又上ふやうなどいふ・うそごびとしてだかくてらんと云ひくろうそ
ドウイフコデといふ詞をとくうつをもあり・又坂のゆふ付をと

とぶおくくや云ふきのをうらんなどい・人ガ云ヒヤラ声ヲアゲテヒタスラナク
くうつをとこをいどころめのらんの教ひを・上へうつしてやし合せて・ヤラといふく
ヤラいをおもちやらんといふくし・又風ごびもつ・ヒタスラ
人のきこえぬごとくのごびも・同じく上へうつしてやと合せて・ヤラ
と澤して・上句をば・一向ニオトヅレモセヌと・落しつをてどうむこおくらん
くうごうつをふ・上うつりて・下ふをあくごもびあると・
○らーハ・サウナと澤を・サウナハさあふくと・ふと成・ふ俵りサウと云・
ふをとをぶりくふ・物色ガ言ぬなのことし・らーと同じおもむきふけて
ハ辞ん・もしへでおどろかーと成・物ヲ忘ウサウナと澤をうめき・らーと
サウナも共ふ人のおそふさふおるをうんで・おーをかりてふをおれば・さて

いそでおいてもむいそぶらんとらーとをしてゐきこのあびくこの
みんなでみびくこゐものみもそこくゐもてよむるこふこをしてくだ間あ
姉こんにゐ間あガフルデアラウ心はあるしい間あガフルサウナのこと仕台乃ア
ラウこサウナとのそこ成をひてそのあびあることゐべし
○かるいさこびこふもカナといへ哉
とれが多色びきる間をび上ておきうへとし。あるいこそこへぐも
こ。澤をべしそべて此辞ハ欲多の間をゆくんこもゐ
ルをハ澤(ウソ)ハそのふこあこそこの間をも。こて上べきこぶかと
○はこの澤いこをぐうり。又書ハふりつなどいひてこどりて。上へ
こぐこぶハテこ澤して下かふくんそこるこの間をこそふひてこる

○書殘一

はこハ寒(ス)かゐこあこるこをびこの曲くめこうこをハ一そ(トラグ)統こそこる。
○きりきるきをハワイと澤ひ。本ガキタワイといへるがこ
しまこそこのはびうこもワイをこへくうこてしうり。後のきさざ
ふおこふあるきるきをハくふ澤さて。
○なるとなるとハチヤとデアルのつてまりてルのそぶろわこる
し。さるなふ。あれまこにてハダこいうり。なりもとくふありのつできうり
こるれバ後をよチヤダこもくこ一つをし又一つ書れバるこおり人ろ
出のあこをなるをおこのおのるこハうのるるこかこうりこすてふ
句るれこをハアレろガカヘルワアレ杜出ノ声ガスルワおこ澤をへー。ひるしハチヤ
こ澤をなりこハ別こて。後のつぐけこあもかこれり。チヤとうつて方ハ後こ

ほうそうを。此ものゝ。切る。泡ようそうちぶそうし。
○ぬぬる。つゝる。ちゝる。きゝる。ちぶる。既かゝる。辞。ハ俗ゝおゝ時
おゝる。ぐゝる。たゝる。いゝる。なりぬなりぬるを。バナツタ。来つる。ハキタるう
えゝる。とバえタ。きゝる。をバアツタる。れのルをちぶりる。
○おゝれを。アゝハレ。落ゝる。ゝる。ゝる。

のうへおよそ歌を雅言とし俗言とし、まして和歌ハ澤山ある
しかる歌を俗言ばかりにてよめるもあり、雅言ばかりにてよめるもあり、
○枕詞序詞ハおほくハ雅言にてよむべきものなれど、俗言にてよめるも
れを澤山にいれよみ、中には雅言ばかりにてよめるもあり、
歌ハかならずこれこれをいふべしと、その歌中の詞をえらびて澤山に
○此ほかの書ども、譯語（クヂヨウバ）のかぎり、俚言（リゲン）の譯のごとくふるき雅言（ガゲン）をあつめ、
をとき、ふるき雅言よりおこれる俚言をしるせり、
て、ちかきころの雅言ばかりをえらびて、その歌中の詞をえらびて澤山に
とのことと、雅言ふるきことばかりをえらびしるせるゆゑ、和歌のやうに
下ばかりと短くも物をいふハ、その歌を味ひ知るハ、その歌なれ詞をしる

なるもの、そのことばのくさ〳〵をあつめ、詞をえらびてよむべきものなり、
に、みそひともじ、かぎりありてハ、あまり俗言ばかりにてよめるもあり、
のおのれもおのれとよびそれぞれのことばをもちひるごとくに、
きことばをえらびて、みそひともじのうちにもかゝるふるきことばと
うのことばをもちゐる、枕詞序詞ハ、雅言ばかりにてよむべきものなり、
をえらびいれよむべきものなり、但しおほくハ人のよく
枕詞序詞ハ、此ふるき雅言ばかりにてよむべきものなり、一二三八句のつゞきで上を上の句と
○うつし歌乃ちがひにて書ハ、澤の及びがたくてあやまりて書ハ、澤の及びがたくてあやまりて書ハ、
ばかりなるをいふなり、又ちがひでもいそがはしきをいふなり

○大ていあゝ人ゝの心の俗（ゾク）ゝうつそゝぢふにまでて、
狂いそゝ白ゝ所ゝ見てそゝもいゝそゝ多ゝそゝ見ゝ
てゝもきゝ所ゝ俗ゝみゝるゝもゝゝて今ハそゝ
さゞゝそゝそゝべての澤（クワン）ごとゝは半ゝかゝ
ゝゝそゝそゝごとゝいゝてゝくゝべゝそゝゝそゝ
かゝづゝそゝで、ゝもゝゝ一そゝゝゝ、ゝゝひゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

イマデ皆メノ〳〵ニソレ〳〵ノ哥ヲヨムヂヤワイノ

ちかひをもとゐもぢしてもうそつかぬ神をもつて祓し男女乃なりをとやそぢ日

きものゝぬけころもをとゝのへむろいらつこなかの

○チカラモ入レズ二天地ヲウゴカシタリ 目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサシタリ

男ト女トノアヒダヲムツマシウナルヤウニシタリ アラクマシイ武士ノ心ヲヤハラ

ゲタリナドスルモノハ哥ヂヤ

このうごめくつちれいきをそだてまもりたまふ

○サテ此 哥ト云モノハ 天地ノハジマツタ時カラデケタワイ

ひろい心をもつて祓をおりをゆるすことといつてもの

○ソレカノ伊弉諾伊弉冉ノミカガ 天ノ浮橋ノ下デ 出夫婦ノ神二オヒテ

リナサレタコヲオヨミナサレタ哥ノコヂヤ

ふるい事をとり出してくりかへしいふさまざまのことをおゆるしたまへ

もつてゐるびめぐりをしてゆり

○サウヂヤケレド 此カリト哥ト云テ世中ニツタハツテキタノハ 天

デハ下照姫ト云神カラハジマリ

もつてるむえんをおゆるみこれめぐりをうしなひをよみえびをうしなふべし

をうぶうつてかぐやくをよみえびをうしなふべし

これらいとじけるともちづきのやうなものなこゝろ

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云タ神ノ出内シヤウデアツタソノ哥ト云ハ

下照姫ノ兄ゴガ 其ノ外ウツクシイ神デ ソノ身ノ光リガ ソコラノ岡ヤ谷
ヘウツイテ照リカガヤイタコトヲヨシダ エビス哥トイヘガアルガ 其ヲデアラウ
コレハ文字ノ数ナドモ定マツタコトモナウテ あノヤウデモナイコトバモヂ
ツ〳〵カナノヨウニちかーしていもさけをのみてまりそおこりまる

○あうろ 此國土デハ 素盞嗚ヲカラヲハジマツタフ
ちりやぬる 神代ノ時ヲ八哥ノ文字ノ数モマダ定マツタコトモナシ コトバ外古風ナーデ
ドウヱコヲヨシダモノヤラ ソノ心ガ 今見テハ ワカリニクイコトデアツタサウナ
あゝのこゝろをしるがかりをー〳〵

ちそやぶる 神代ノ時ヲ八哥ノ文字ノ数モマダ定マツタコトモナシ コトバ外古風ナーデ
ドウヱコヲヨシダモノヤラ ソノ心ガ 今見テハ ワカリニクイコトデアツタサウナ
人の代となりてしをさけをのみてもどろなまり

到〳〵もどいよ〳〵きる

○サテ人ノ代ニナツテカラ カノ素盞嗚ヲカラ始マツタ哥ノトホリニ 此一
字ニサヨムニハナリタクワシイー

そさのをは みことにおあてるおろち許はこのくし女にはそこ
話をむとてどげもはすまでそりすすぶるそのところふ
やいろのをろちあり川をつそとよみ給へるなり

○スサノヲノ尊ハ天照大神ノ御兄ゴ様デヤ ミテノ御ヲトヲハ 女ト一所
ニ住ナサレヌトテ 出ヤラレテ 雲カ立タヨウナ流ナサレテ オヨミナサレタ所ノコトヂヤ
八ヤ〳〵ろいつとハをろちをたつるこそふハをたつるその八をがきを

○一アレイクヘモ雲ガタツタ　ニアノ出ル雲ノ八ヘ垣ワイノ　三五妻ヲ入レル宮ノ
タメニ　アレ雲ガ八ヘ垣ヲ作ッタ　五アノ八ヘ垣ワイノ
いづといひでくつとも心でくつでまかてで花を折でそ給うべ
ふこ(ぶこ)ろ(ら)くばおおくちなぐさめふまる
○サウシテサ　花ヲ賞翫シタリ　そのヲウラヤンダリ　そのヲ感ジタリ　そのヲ
愛シタリスルヤウナ心詞ガオホウザマ(ぐ)ニナッタモノヂヤワイ
とうきさとこ(ら)もいでこ(ら)もいでこ(ら)もやまのちこ(ら)むぢより那りて行方をしる
こ(ら)もろこ(ら)も沼もやのちこ(ら)むぢより那りて行方をしる
びくまでおひのぶるぢ(ぐ)こ(ら)かくはどくなるべし

キツウ遠イ歌ナモ　タッタ一足フミダス足モトカラ始マッテナイノ月モ何年
モカカルホドノ取マデモ(ママ)ヰキ　又キツウ高イ山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ
成ッテツモツテ雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デハ(ママ)モ其ノ上物デナケレバ
雞波ハ乃ち(ら)こハみくぢのおろちめ那り
○サテ雞波津ノ哥ハ天子ノ位ヲヨヨシダ哥ノハジメヂヤ
大きぐ(ぎ)記乃みくぢ(ぎ)はなふそづをしみこ(ら)くはくる時ゑま
をこ(ご)ひふゆづりてこ(ら)くぬふつきねをで三年にちりふるまバ
王ニ(リニ)ト云ヘル人乃いまるとも(ママ)ひこ(ら)くよみてしるべてまろこ(ら)ろこ(ら)ろこ(ら)ろこ(ら)ろ
この花を梅乃事ト云ハ　仁徳天皇ノ雞波津ニ宮ヲサセテ皇子ト申シタ

時ニ東宮宇治ノ若郎子トイヒタガヒニユヅリアフテ仁位ニハツキナサレイデニ年ニナッタニヨッテ王仁トイフ人ガ マチカ子テンキニ召フテ 仁徳天皇ヘヨンデ上タ哥チヤ ソヲ子須賀直見ガツヒクヽハ東ヲヽハ東ヲトヲ字ヲヨムヽヽヽヽヽ

○アサカ山ノ哥ハ奥州ノ采女ノタハムレカラヨンダ哥デ

かつ〳〵きえおもかきつをみちのおくへたふしうちみだるゝ時ふまのつゆ

さも〳〵おろそかおりとてまうをおどろかれとてさましかつ〳〵もどる女乃ちつ〳〵をとりてよめるなりこゝを

少ゞおやきみのかんとをふりる

○コレハ葛城王トニヨッテ位用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ 國ノ守ナドガ馳走ヤシタケレド アレラヒガ鹿末ナトテ 葛城王ガキツウブケウニ思ハレタ時ニ ソヲ王ノ采女デアッタ女ガ 盃ヲ持テ出テヨンダ哥チヤトコロガ此哥デ葛城王ノキゲンガナホッタワイ

けぬ〳〵とうち〳〵にこの父母乃やうな人のそゞめもうまうそよなう〳〵

○此十二ハヅト アサカ山ト二首ノ哥ハ哥ノ始メニモマヅ是ヲナラウコトヂヤワイ

そと〳〵このはさゝめもりもるとかく〳〵はゝくゝもかくゝぞ

○サテマヅ哥ニ六ツノワケガアルヂヤ 唐ノ詩ニモ大カタ此六ツノワケガサアルデアラウ

そのむくさおもしろくあやしきのみぶをそへたるもの
○ソノ六イロト云ニツニハ人ノ カノ仁徳天皇ヲオヨソヘヤシタノ
なふそづかぬやこの花をぎ
○雖波津ニサクコノ花ガ 三 サアキウハ春サキヂヤト云テコノ花ガ
ふゆごもりいまはさべしとくやこれをも
といつるなるべし
○トニ云ヤウナガサウデアラウ
ぬきみだりかをかそへうる
咲なかおもひつくる方はあらじきみ
○咲テアル花ニ ウツナリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルコトワイ 身ニ
心労ナコトノデケテクルモシラズニサ

こゝろをおくべし
こをばくくとかひひてあり
ひとしくかひにくにくむそのこゝろをしるべし
あしくうるしにうるかぜをそをりはうるべき
○此カゾヘ哥ト云ハ そのヲタベコトニ云テ 物ニタトヘナドモセヌモノヂヤ ソレニ
此咲花ニトニ云コヲカゾヘ哥ニ出シタハ ドウ云心ヂヤヤラガテンガイカヌ 三番ノタベコトウタト云所ヘ出シタヲガサ ヤカゾヘ哥ニハ叶ウデアラウ
みのやまをなをなをくくし
君ライをさゝげまつりおきていのれ身にきえやをくくし
○オマヘガ手前ニ 二 起ティナヒヲタナラ ワレハ今カラ 云ヒワヨラタベ

ゴトニ消ルヤウニ云フノタテルデカナァラウ　君ホド一本者ぢゃ
といふなぶべ——
こまハ物カラそろへてそろへてまがやうかおかしあるへやう
ふりまはしやうがよくかるへとしてぞ
○ヤナスラ云トハ　物ニナヅラヘテ物ヤウナト云ヤウニヨシダラ云ヤガ
ヤ君ニケサト云ハ　ヨウヤウタトモ見エヌ
るもちめのおやうふこと
○養蠶（カヒコ）ノマユニコモリテアルヤウニ　「一」親ノヒザモトニ居テ外ヘ出ヌ娘ナレバ
ドウモエアハイデ　サテモくシンキナーカナ
おやうおやうをとにをかうよべ〳〵む

○ムヤウナ哥ガヤナスラヘ云トハ云ハヤウデアラウカ
ようふかあるへう
ヒが出をよむととつきじうつこと
○タトヒ海濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモオンガ云ヘシダイ教ハヨミツクサレマイ
こまハよろづの事本をるきぐものかたりて心をこんそるく
ヤうにかをもてることを
じやうなれバそあしきをもをりへるおろべ
○ヤタトヘ云トハ　イロくノ草木ヤをケダモノナド云せテ思フ心ヲ云せタモノ
チヤッレニヤワガ名ハト云ハカクレタ取ガサナイ　タトヘ云ハ物ヲ云テ云テアラハニハ云ハ
ヌヂヤヨウテ　カクレタ取ガナウテハ面白ウナイ

レバスコシモキウクカハウタ今ノヲ出シタモノデアラウ

モ白イ斑ノアルヤウナ柄ヲツケテ居ルガ此ノ柄ガ凡ソ十二三年モ立ツト十ケタアイ

○スマノ浦ノ海ニ居ル魚ヨリ外ニ此ノヤウニ美シイ魚ハアルマイ

此ノヤウナ魚ヲ食ベルノハ勿体ナイヤウデモアラウカ

○ソレカラ又ヒトツ申シ上ゲマスガ此ノ魚ノ名ヲ呼ブニ

ムツヲリヤウヲキヨトイヒ又ハ

○偽リト云フガナイ世中デアルカラ此ノ魚ノ名ヲ呼ブニモ

トヽヲリヤウヲ

ト云フノガヨイデセウ

コレハ御尤モノ事デアリマス。

○ソレカラ又ヒトツ申シ上ゲマスガ此ノ魚ノ名ヲ呼ブニ

ムツヲリヤウヲキヨトイヒ又ハ

○偽リト云フガナイ世中デアルカラ此ノ魚ノ名ヲ呼ブニモ

トヽヲリヤウヲ

ト云フノガヨイデセウ

コレハ御尤モノ事デアリマス。

ふうるノようでとそんうゝとやらでござる

○ソレカラ又ヒトツ申シ上ゲマスガ此ノ魚ノ名ヲ呼ブニ

カラ叶ハヌ ソレカラトメノトヽ云フ物デアラウカ

○山掛ヲ腹一イ十分ニ見タ芋モアリガタイコカナ 花ノチルクヲ年ノアライ風モ

フカヌ 御カウナラ代デサ ソレカラ又ヒトツ

むつゝーハいゝとひゝう

ソレカラ又ヒトツ

○ソレカラ屋形ハゲニモ繁昌ナコトヽ云フ叶ウデアラウカ

モ四ツモツイテサテ〳〵御カウナラ普請ヂヤ

おほし、幸をほねて祈ふつゞくもあるべし

○サイハヒヲトクハ 古代ヲホメテ 神〻申スギヤ ソレ許此殿ハト云ヲハドウモイハヒヲトハサヘエヌテイギヤ

其日〳〵ヲ送ルツレ〳〵ヲ紛ラスデモアラウカ マアタイテイヲノンキニ

ニモ〳〵ヤモコレガヨイデアラウカ ソレデモアノヨウニモ〳〵ト

ソヽクヽ坊〳〵神ヅキアヽフナシ

○コレナドノヲガイハヒヲトヨリハスコシ叶ウデモアラウカ マアタイテイヲノンキニ

ハイロ〳〵分レヲリハ ドウモサウハワケラレヌコヽデゴザル

今ヲヨノヲヲフつき人乃ヲ見ル事

○サテ今ノ世中ハ 人ノ心ガ花〳〵シイコトニツイテ ウハキニナツタカラシテ アダナキツトセヌヨウノバカリデケルニヨツテ

いろこのくをもおそうもまた本はなく人〳〵をぬし〳〵なりてまよわれおやこゝろおい死をしきほふいづこをいづこをもけづりにくり

○大切ナヲガ 色すきノ家ノ [ゆるし] アラハシテダサレヌヤウニセウナシマウタ [なの]

そのそゞめ何おもへどもかく〳〵なもひあ〳〵ぬ

○ホンタイノトコヨヲ忘ウテ見レバカウアラウコトデハナイ

いろ〳〵ノヲヲみうぢをきの花乃月の影ぢふきみ〳〵

ふんくばれんしてきてふつけてうしめ
○昔ハ代々天子様ガ 春ノ花的ニ秋ノ月夜ナド云ハ イツデモ ツメテ
居ヨヤウニ兼テハ前ノメシテ ナヅレバ
ナルハ花ヲミテモ月ヲ見テモ ヨリ好キト
ヲボシメスヤウニゾ ソレヲ ヨリ好ムト云ハヌ
○サウシテ或ハ花ヲ見タリ月ヲ見テ ヨリツキモナイ事ナドマデ仰ラレタリ
或月ニ執心シテ又行テハ マダ出ヌ内モシラヌ所ヲアケスヘトシテアルイタリスルヤウナ風流心ヲ ヨソヨシ
ダ哥デ考ヘテハ沙汰ナサレテ ソノ内ヨツテ
十者デヤト云ヲ ハ存知ナサレタモヤウデヤ 肯ハサ

花ヲミテモ月ヲ見テモ ヨリ好キト
ヲボシメスヤウニゾ ソレヲ ヨリ好ムト云ハヌ
○サテ又サガリデナニサゾ石ニタトヘタリ統波山ニツケタリシテ 君ヲハ祈リヤシ
ヨラレテ ヲリヲリニ ミンナ御ヨソヒノ
○又ハ昼過夕ヨヨビノアル時ヤ 心ニアマルホドオモシロイヲノアル時ヤナド

姫じまりみ[illegible]

○アルイハ又富士ノ山ノケムリニヨソヘテ人ヲ忘レヌト忍フコヲ云タリ　松虫ノ声ヲキイテ友ダチヲナツカシウ忍ウタリ

[illegible]ノ江乃杉もひとおひ乃やうふおぼえ

○キツウ年ガヨツテハ高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ松ト　相追（アヒオヒ）ナヤウニ忍ハレタリスル時ニモヨミ

そハもや・あぢきなく追（オ）ことをもとめ・お追（オ）くるをもとめ・いくぐくと[illegible]後もなく・大てい同じほどにおとろへゆくべきかいへり・

をゝこ山のむゝ[illegible]波号ひいでをこれぐ[illegible]ゝの一ときをそふ[illegible]

ふもとをいひてでなぐさめたり

○又年ヨツテハ男ハラトコザカリデアッタ昔ノヨヲ思ヒダシ　女ハワカザカリノ早ウスギタコトヲ愚癡（グチ）ニクヨ〳〵ト忍ウヤウナ時モミナヨヲヨンデサ心ヲハラシタヽーヂヤワイ

又年[illegible]あ[illegible]ふ花乃ちら[illegible]

○又年ヨロ敷モノナルヨヲムタリ秋ノユフカタ木ノ紫ノオチル音ヲキイタリ

ちるハもゝ[illegible]ふかでこそ秋ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

かくしてとうとくなりぬ

○アルイハ昨日マデハ繁昌シテ何ノ心ニゴトモナカリツタ者ガ　二ハカニ不仕合セニナツテナゲキヲシタリ　又モトシタシカリツタ中ガ　ソヲシニナツタリシタトキ

○或ハ又末ノ松山ノ浪ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ　萩ノ下葉ヲナガメタリ　咲ノ時ノ羽根ガキスル教ヲカズヘタリ

○或ハ又ナニゴトモ人ニハナシヲキヽ　ヒトリ川ヲヒキテ世ノ中ヲウラ〳〵ときつゝふ

○或ハ[傍]身ノウイコトヲ人ニハナシ　吉野川ヲタトヘニ引テ世中ヲ恨シタリ

きつゝふしつゝる詞次の文しにひろをそいで

今ハ昔しの山もりのあびろの橋と造るおりとき

く人をおにのそゝくをなぐさめをゐ

○又今デハモウ富士山モ煙ノタヽヌヤウニナリ　長柄ノ橋モ又新シウ公家タトサヘ人ナドハ別ニテ今ヨムハツカリデサ心ヲハラシタリーヂヤワイ

浪ヲ盡ルトヲヽ盡ルトヲヽ浪ハ盡ルことなきぬ

ちりとそゝくをおりとハ心そび〳〵と雅そのふるまひ

ゐ

○ズツト昔カラ右ノ通リ侍ハツテキタウニモ奈良ノ時代カラハ別ニテヒロツタワ

イ　其ノ時代ニ定メテ一哥ノワケヲヨウ存知デアッタモノデカナアラウ

かのおろんはをおきみ川乃ながれのもゆる秋人さ行なんうれおごとなりをる

○そも〳〵世ニ正三位柿本ノ人麿ハ哥ノ聖人デサアッタワイ

ある時ニ人ヒトヲ招キもてなしの為ニ哥ヲ詠ジ給フベシトテ

○コレハマコトニ君臣合躰トモイフベキデアラウ

秋乃ほをた田川ニ〳〵れるもみぢをばみるどの作目ニ錦ノヤウ

又春ハおろ〳〵吉野ノ山乃ふもとハ人さ行ごろろ〳〵ハ

きるうらのこなんおろえをる

○秋ニナルニ立田川ニ流レル紅葉ヲバ奈良ノ帝ノ作目ニ錦ノヤウ ト言ハレサセ

春ノ来ル吉野山ノ桜ヲバ人麿ノ心ニハ雲カトバカリサヘ見ハレタワイ

又山のべノ赤人ト云人ガアッタワイ コレモ哥ニ秀ヒイデタ人デアッタワイ

人まろをたろ人ごみかくむらくかくろをしハ人まろごも

○人マロハ赤人ノ上ニタツテハイラレヌカラウト　赤人ハ人マロノ下ヘオキニクイ

クラ井ナコトデサアッタワイ

なごみごみごどのほうこ

多つ川ニ紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

人まろ

物ヲもとゝしてぞ詠さうこゝもあまてバ
ほのぐとつゝの浦乃秋者方ふ時るゝとゆく永をぞ思ふ
赤人
きよ見ふをゝもつこふとこゝ
○春ノ野へスミレヲツマウト出ウテ オレハ来タガ アマリイドガデ面白サニ
此野デサ一夜寝タワイノ
ヨク見浦ふをみちをゞかゝを
○若ノ浦へホガミチクレバ干潟ガ有サニ 芦糸ノ方ヲ指テ鶴ガ鳴テワタルアレ
此人ゝ〳〵おきてし又をぐもゝゝ人
ゝとのよもゝ〳〵ふくもえぞぞゝを
をる

○此二人ノ外ニモ又スグレタ人ハ[物もの]此代〳〵[約の]時ゝタエズサアツタワイ
ちもとゝちきよちをあ川外えてもむ美ゝえう志ゝとな
づきゝ〳〵後もあり〳〵
○サテ式奈良ノ[此]時代マデノ哥ドモヲ集メテ為集トサル号ヲツケラレタワイ
ゝふいふゝ〳〵ぺのおゝゝをゝとゝふれゝゝ
ちうれゝゝふゝ」でこれうもえゝくるゝとゝ
かの時ゝよりこのゝ〳〵年ハゝゝと云ウ
○其此時代カラ二千〳〵年ハ百年アマリ此代ハ十代ニサナルワイ
ゝふいふゝ〳〵乃ゝをゝとゝふれゝゝ
ぞゝづゝふひとりぬゝゝとゝ

ところもあひろ〳〵なる事しかり

○其間ニ昔ノタモ哥ノワケモヨウ知ッタ人ヨシダ人ハ多サシ六ナイ ワヅカニ二人カニ人ト云ホドノコデアッタメ チヤガソレモ メガヒニ得タトコロト得ヌトコロガサアッテカノ人麻呂ヤ赤人ホドニ十分雄ノナイ名人トハイハレヌ

今ハ其ノ沙汰ヲスルモノモアリ其人ヲバヤクヤウナモノトシテ

○サテ今其人ノタヲヨウデヤガモ内ニ官位ノ高イ人ノスハヨカロウナヤウナ物チヤニヨッテ ソレヤノケテオイテ

そのやうなちうもきようふそのあきこゝろえこゝる人を

○ソノ官位ノ高イ方デサヘニ近イ代ニノ名ノサエタ方ハ

そのやうな位ニ遍昭ハ名ハサヘ高イ人ヲ

ところ〳〵かゝるをうれしがりてふみをとりかはしつゝ

○マツ僧正遍昭ハ名ノソデイハ得テアッタケレド マコトカスクナイ 物ニタトヘテイハヾナラ給ニカイテアルオヤマヲヽテサシテ

浅ましう糸ところしかゝるふみをもふみぬるあのやかぎの

もちもなのおぐりのふさまでも

袖ばかりおちてくるよりおちてくる

名ばかりでおちてくるぞうそ

ゆくさきもおぼつかなきあまぐものあとなきふるまひ

花の色なくてさくらのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ名ハコロガアッテ河カタラヌ テウドシボンダ名ノ色ハナウ

トツテ　ニホヒノおツテアルヤウナ

月やあらぬ春やむかしは物ぞとも人のこゝろぞ花とのみ見ん

大ていハ月をもでじこれぞ人乃おいゝ耶気乃流りまバ人乃おいゝ耶気乃

孫めゝ春ハ花をそうれゝ（侍）ぬんなれやそもでいおゝゝゝ

そゞおきく人乃よきゝぬきゝゝんゞ出てゝ

○文室康秀ハ行ハタクミデ　ふの脉ガクノ汙ト相並セヌ　イハバアキンドノ

エイキル物ヲ着タヤウナモノヂヤ

吹ゝふむべの嵐ハ雲乃路をのみ月乃ひかりの待ゑまれみうゞの作ゑ忘ゑ

○宇治山ノ作者撰ハ行ガオクフカウテ　ソレテ始ト云テトノツリアヒガヨッカリ

トせヌイハバ秋月ヲ見ルノニ暁ノ雲ノデ　キタヤウナモノヂヤ

ゆふ名ハそやこの行ゑも知らもむ逢坂乃関

よめゝゝゝとおりくすゝ神でかゝとゝ色をかよハゝゝゝよゝゝゝ

おてほよかしびいそぐ紀女乃
ほようぬをそれ乃ゐをばちるべし

○小野小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナルベシ
エイカノナヤム取ノアル二似タ物ヂヤ ソヨウナイノハ女ノヨユエデアラウ

ゐひつぬとぢや人のそくつむ
名そでうつろ袖をよの中人のそろれもむこぞひろく
つびぬゐ心をうゑ紀女の柘を施てきをふろひ
そしほうとむ統の句

つぐせこぐくきよひろうさ
太ととしおうなねし ハ 〔ヲバオヲリ〕 その

山人の花はうげふやそてめるぐだ
○大友黒主ハ オモシロイ事ガアツテ ヨイ 新ヲ負テ
井ルヤウガオヤヂガ 花ノ木ノ下デホニデ居ルヤウナテイヤ 十秋云、澤ホタモシロイ
ト云字序ヲ隠ベシ有遠與ヲ以ふりて トコロガアツテ ヨイハ
ろべし此序ニ有ル如ノそしぶ者ろし
只出テ立一起ノ体ナリ

後山いぎをそれんきこゆ
このからよ人へそゆひとしめるし
ろごろそやしにたびきこの柴ふ
そおもひくそのさゐもちぬもる
○此外三モ名ノアル人ニハ野ニヒロガツテアル葛ヤ林ニシゲウハエテアル木ノ葉ヤ

ナドノゴトクニ タニトアルケレドモ 皆自分ニ哥ヂヤト思ウテ居ルバカリデ

一 実ニ哥上ズモノ、クハシイサウスヲバ知ラヌモノヂヤトヲエル

カク信ズルヨウニナルマデニ先生ノ教ヲ受ケネバナラヌ

のときてよりふかむちりぬる

○サテ右ノ如ニリデアルタトコロニ 時當代上ニ様ノ天下ヲ治メサセラルヽノ

モ今年デ九年 二廿ナルガ

ある神きおりんうこーこの活やーなのやうまでなれるに

おちん先ぐをよろまぼくそ。(活)

○ドコカラドコマデモモヒタ所ノナイ仁慈悲ガ 日本ノ外ニデイキワタッテ イヅク

ノウラマデモ ミナソノ(おかげ)蔭ヲカウムラヌ者ハナイ雖有イ時節デ

よろづのようりおてくれきこーこをいまるまでしもあるかはぬあるりに

○イロ〳〵ノ政事ヲトリ行ハサラルヽニ其外ノ一切ノ事(イッサイ)ニデヲ

仁ステアツバサレヌアヽリニ

いあーこの事沖もおそれじりふーしるをもおこー活ふ

とて今ととをおバー後の学ふもはこと

○古アツタ事ヲモ仁恋アリバサル、ニイ年久シウナツタ事ヲモ仁取立テアツ

バサト云ヒ(ママ)石デ 今モ仁恋バサレ又後ノ人ヘモ傳バレト思ヒテ

延喜五年二月十八日小大内紀きのとしはり書はとす(ママ)

づうときのはつゆきちきのうひのさうんおーかもちのみ

つる由つの角生みぶのくもでう給らふおそをしまて
○前年 延喜十五年 四月十八日ニソレラに人ノ者へ作月ラレテ
まんそうきうにつぬみきうこうげうしよをもるてま
つうしをれひてなを
○万葉集ニ入ラヌフルイラ并ニ自分ノラヲモ集メテ差上ケマスル
ヤウニト作月ラレテサ
そをぶおるもも梅をうさをとりをでめてほとぎびをきく
もこだちをうて雪ふるふりまで
○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカガスラカラウツタツテ 郭公ヲキクラウ ホ紫
ヲ折ル雪ヲ見ルノデ四季ノ外

又法師ノ名ホノをてをおりひ人をとそひ
○又鶴亀ニツケテ君ノ寿命ヲ長カレト祝ヒ申シタリ其外人ヲモ祝フタノ
秋萩及ケ紙ニ書テ法師ヲ坂山ニ送ルヲ坂山ニ向ヲいのり
○又秋ノ萩ノ花ヤ及ノ草ヲ見テハ妻ヲ恋シウ思フメ恋ノラ ヲ坂山ニテ
旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ルラナド
○アルイハ四季恋ナドノ部ニモイラヌイロくノ雑ノ哥ニテヲサ撰ニサイト
ひろハ春及秋冬ホもくれうばうむそうびをひろ
作付ラレテヲ取リ撰テ集メタ
ヨベてちらうとそうこまで紀ろびけて古今和哥集とい
○ヲ取給ヒ十首ヲノ数ガ北巻 歌号ハ古今 和哥集トツケタ

かくおのづとあり所をえそうばとて心下あけ急ぐ毎の上
さごろもそでおのくかたもりぬるばし
○カヤウニ此度此集ガ出来タデ 小下の 昔ノ採集ノ跡モ断絶セズ 又毎のまゐの
ヨイ方ガ数オホクアッテツタヘナレバ
いよいよ好き方の門の開けなることみもきことぞ後ひし
乃いとゞおほきことのそひくへき
○モウコレカラハ哥ノ風(フウ)ノワルニウツル気ヅカヒモナウテ 次ニ此道ノ未長
ウ繁昌スルメデタイコトバガリガサアラウ。
そもまことにおくぶかきみ花ひまくおくてむろきさ
名のこ秋の春はなみだをかこそれば

○サテ歌ノ ドモカ我ハ ヨミ方ニハ 秋のよの 上手ナヤウニ云ヒハヤサレルコトナレバ まゐのとる 才モシロイトコロモナイノニ 実(ミ)デモ
ナイ名バカリ
おのがをこへこぼる。三井寺の僧がいまくまでこばこれ
ー得ぬるでし。これ川岸にもれてみづの泡のごとく消なむ
うを得ぬるがごとく伊勢が考のみも後の名ぬけるこ
らが中の時雨そことありくいり。援井ま秋もまれ
いでて。又或人をいくそもまことぶしられ侍るべし。おのが
こゝろをこがしとこゝろえ侍らんも本意の文字ありとも
此ごろのうたの作しまゐこゝろえ侍らんこそ

気(ナメ)き後ふ用ひらるゝ例なるべバ世
かりそ人乃ふもとそうめんりもちおもへど
○世間ノ人ノ聞トコロモナシトアラウカト思ハレ又一ツ二ハ亡ノ心モ恥カシケレドモ
ゟ多ゝびくもそゝちおもく藤乃おき坤ハたゝゆきゝぐらの
空ふおもゝぐくうまれてしぬるおほふあゝ我ゟ尊とびぬる
○拙者ドモガ世ニ同シヤウニ生レアハせテ カヤウナ作付ラレノアル時ニ逢ッ
タコトヲサ くるひく乃もの タッテモ居テモ なく乃もの 緑テモリステモ恨ビマス
云ゝまゝ形くなりふゝとゞくらゐなす ゝまれるう那
○カノ人麻呂ハトウ〳〵クナッテ三ウタ尼哥ノ道ハノコッテアルサテく難有イーカナ
ゟゝひゝきゝうりゝゝるゝしびゆきうよゝと

○コレカラ後タトヒ時代が降〳〵カハッテドヤウニナリユクトモ
このゝゝもゝ若 あゝをや なをゟ
せゝでゝてまゝ坂のゝづゝもゝくうゝ
○此集カ若世間ニ をゝ乃のいゝく なれ乃の タエウセズニ
ハッテ井ヘアリタエラバ あゝをやの四字ハ次のあをやぎよりまでと
ゟゝ係るべゝ。もゝハ若ゟて。久しくとゞまれゞいよ〳〵かゝる道
ゟの形ゝゟをもちまゝのゝ係をえゝゝむ人を
○末代ニ至テ 尊ノヤウスヲモヨク知リ物モ心得テアラウ人ハ
大ゝゝ此月波ゝるがおゝしくにゐゝへをたよゞて今をま
ひざゝ先うと

○此集ヲ（いまゝ）サテ〳〵結構ナ集ヂヤトニテ天十月ヲクハヘルゴトクニ仰ギタツト
ニテ今此代當代ヲシタハヌトニハアルマイケサテ　千秋萬歳ノ後世マデノ人モ
マヨフマヒソノ時代ヲ

古今和歌集巻第一春歌上

春歌上

ゆくとしゝ今きつゝ日とゝもる

左京元方

年ゆけばふる雪ハ身にそへりつゝ一とせごとやいつもつむ

○年ノ内ニ春ガキタワイ　コレデハ
ウカ　ヤツパリコトシトニタモノデアラウカ
同シ一年ノ内ヲ春ト

まつらめちる日よめる　紀貫之

神ひもろぎ（ママ）てむすびしもろかつらおのれ春にもあふくらむ

○神ヲヌラシテスグヲ水ノコホツテアルノヲ　春ノ手タヽ今月ノ風ガフイテトカス

デアラウカ（らん）ヤ

　　影ニテ

よくよく人ヽらぢ

○春ガキテ雪ノタツタハドレドコヂヤゾ　コレバ吉野山ニハマダ雪ガフツテ
ナカヽヽ春ノケ色ハ見エヌガ

　二條后ヨシ乃ニ

雪はうち小春ハ事ホリもしうぐひす

○ヲダ雪ノツモツテアル処ヘ春ガキタワイコデハ鶯ノ氷ツタ（今）ヲモウトケルデアラウカ（らん）ヤ

　　影ニテ

梅がえにきゐるうぐひすこゑかけてなほさえかへれ雪の山かぜ

よみ人しらず

○梅ノ枝ヘキテ居ル鳥ハハヤ鳴ケレドマダ山ヤウニ春マデカケテ雪ガフツ
テ春ノヤウニモナイ　鳥ガキヽドコロガナイ

雪がちるあわかゝ梅の花ならなくに

○春ニナツタレバ花モヤヽモヒラケ雪ナドモ降ル枝ヽ鳥乃ナク
ヽ声ナドモ聞エテ居ルガソレユヱデヤ（丑らん）ヤラテ　春ニナツタレバ
ソノマヽ雪ヲ又マダ日ニ消又ニ又ヽ降ツテアル木ノ枝ノ雪ガ花ニ見エル

　　紀貫之

ふゆごもりはるのしらゆきふりにけりしたのみどりもいろまさりつゝ

○トウカラ花ヽヽヲ　ソノ意ヒヨコデ居ルガソレユヱデヤ（丑らん）ヤラテ　春ニナツタレバ
ソノマヽ雪ヲ又マダ日ニ消又ニ又ヽ降ツテアル木ノ枝ノ雪ガ花ニ見エル

此ころ古くさつゆきバ三の句・をりふしもうぶすなどゝ
よくもいひ得たる句なり多くハ・綿をも此集のごとふいひそへ
ふりもせず・耳かきもなふ・ふりもでしこの綿ごとくふりつもる
の綿ごとくさがしらふ改元ごとくふりもみべし・松もごとくふるべし
て・ハ・結のらむとかをひろふ・されバ結を一なふ・ふるもうとする
も・降てかまひなひを見ひて・改めくるふやわらん・
ひとつ人のつくさぬのおろきおろしうちきとおらう
二條后よとうあの御門やとそむ存できてえりる時・宮月言
おまへ〳〵ふ給へ〳〵てあやせでうあひだ〳〵ふ見ハてりねど〳〵
のかゝらにありかてをよまをおひりる

○此句ノ春日ノ光ヤウナ雉有イ此恵ヲ蒙リマスル私デゴザリマスレバ 手ヨリ
マデカヤウニ頭ガ雪ニナリマスルハサ雉ぎニ有ニマスルコマリマシタ物デゴザリマス
君はありもそ成とめ
きのふ〳〵ゆき

○庭ガタツテ 木ドモノコノメモ張生ル春ノコロ ハヤウニ雪ガフレバ 花ノナイ里
ニモサ 花ガチルワイ トシテ花トヲエル

ぬんやのやをひで
ぬぐ〳〵よあし〳〵ふる
夫のそゞめふとめる
まちやと兒共やおそくきくきてそうむうひてそぶふもふぞでも有うる

○ハヤ春ニナッタイナレバ モウ花ガサキサウナ物ヂヤニ マダサカヌハ 春ノ来ルガホドヨリ早イノカ 花ノサクノガホドヨリオソイノカ 当ナリ先鳴ダラ ソレデドチラヂヤトニヲコトガシレウニ サテモマア 当サヘナカヌコトカナ

きのとどめよう

きもめしく人をおもふこころぞひとを乃なるぬこのりハおしどぞ男女

○春ガキタト人ハ云ケレド ナゴリガナカヌ ナニデモ当ノチカヌウチハイツマデモ オレハ 春デハアルマイトサ思ウ

宗雪はきえんの雪玄々の句 添キさきこと

谷風ふとくふくおと初音ぞふくうぐひすの乃どや 春ノ来ルガホドヨリ

○春ノ初ヲ 谷風ニアツコヽトケル氷ノヒマヲ ドコカラウチタヽス浪ハテウド花ノヤウニ見エルガ コレガ春ノハツ花トヲモノデアラウカ

きのとどめよう

○風吹テイク幸使ニ花ノ香ヲ(ニ)(ミ)コトツケテヤッテサソヒタシテクル(やっ)(さそ)

花乃色を風にまかせてちりかゝるこそ乃ちるべきハや

大江千里 ニハスルヂヤ 内者

○谷カラ出テ出テクル当ノ声ガナクバ 春ノキタトヲモヒヨルガシラウゾ

左京 株梁

春ごとに花もおなじ乃里ハものうからぬ当ぞなくて

○春ニナッテモ 花モナイ山中ノ里デハ 十二モハリアゲガナサニ鳴ト(キ)モサウナ声ヲシ

テサ ヰガナク ○よ秋さだ白、あるかるる水で、考のなくとうふこそて、
ぞゆゞいものうるる秋へくまるてふをいと此おおや！

郭公

よみ人しらず

みべちらくめのーをもばうぐひすの
○ワレハ野ヘノ近イホニスマヒヲシテ井山バ ヰガヨウ吟テ 毎日アサカラキ マス
ま日ぬハリふるなやきそそ草まの
○此春日野ヲバ今日ハ焼テクレルヨ 三 妻モ来テアソンデ居ルおモキテ遊デ居ルホドニ
かそがみのとぶ火のやちぢてんよいまんくうりてこうみたてむ
○此ま日ヤフノ飛火ヤノ番人ヨ 告テヤウスヲアルテクレイ ソチハ此ヤニ住デ居バ
タイガイ知レデアラウガ マヲイクカダリアシテカヲ 若菜ヨツミニハ来ウゾ
みふーハ松乃ま だよきえねくふそやこを堅べ乃わうれつくまり

○山ニハアレ若サヘヽダキエズニアッテ 松ナドモ白ウアルエルニ 京ハヤッキリト春
メイテ 野ヘンヘ人ガデ・ 若菜ヲツムワイ
何づきうおーしてまる日りぬ乃日さんふーバこうれはみてむ
○一 オ・レナメテ ドコモカモ まゐガマヅ今日ハフッタガ アスハ日フッタラバ オ
ホタ若菜ガツマル、クラサニトルデアラウホドニ 外ヘ出テ 若菜ヲッマウゾ
仁和のみうでみこふおまーくりぬ日うふ
ぬ乃ひりくまうふ
夫ぐーあまちぬふ出てこがころもでふ吉ハ乃りつく
○フコモトヘ 進ゼウト存ジテ 野ヘ出テ ハ若菜ヲツンダガ 外ノ衆イコデ
袖ヘ雪ガフリカ・ツテ サテくナンギヲ致レテツンダ若菜デゴザル

○イツモ乃ハラヌ松ノ青イ色ニ　春ガキタレバ　マニ入染タヤウニ　色ガマシタワイ

○二番　春ノアルタビニ　北ヘシテ来ノ雪ノ色イ色ガサ　ダンダンマスワイ

ヒガセニガ乃統ヲヲシ・妻ガ夫ノ衣ヲヲルト詞ヘ。飯枝誤まり。

春柳乃糸ヨリカケル春ノコロハ

○糸ヲヨッテハホコロビモスラーヂヤニ　まイ柳ノ糸ヲヨリカケル春ノコロハ

ケツクサ　花ガ咲ミダレテホコロビルワイ　ほころぶるハ花乃事ニとりなす。

和人もおやとりは杉を云ふ

春日せけとりねつゝ小やもろ人乃神ふりそへゝ乃

ほゝゆら

○ワザくゝ春日せノ若菜ヲツミヤラ　アレ白妙ノ袖ヲフッテツレダツテ人ガイクワ

あすゝありそ乃の浪いそ。処へとそえ。ハ

生原ノ小松に

訳ニゝ

春ぬきる衣乃うら紅もぬきすてゝ

○春ノ着ル衣ハ横ノ糸ガウスサニ　山風ニサミダレデアラウサウえエル

空霞ぬきすの衣ふかみ。添ひもゆきの松に

と紀ゝ松乃みどりも春ノ色ハ今一しほのさりまさる

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

○アレアノ折ヲ見レバ ウスモエギ色ノ糸ヲヨッテカケテ キレイナ白イ玉ヲ ト ア
玉ニシテツナイデ サテモ〳〵えうすな春ノ物カナ 飾物ヨろし

もゝちさへづる春もあそびくらせ人〳〵

○誰ヤナニヤカヤ モノオモシロウサヘヅル春ハ 物ゴトニ十二モ万モ 改ツテ アタラシウ
ナルケレ共 オレガ式身バカリハ サクルタビニダンダントフルウナッテイク
間は
をちこちの鳥のさへづりもあそびくらせ人〳〵

○アチモコチモ 紫内モシラヌ山中ニナンデヤカ呼子鳥ガナイテ人ヲヨブガ ドコゾ

侍正遍昭

ヤラサテ〳〵ト アンマリナッカリシテシマレスマーカナ

○モシナッタレバ アレ雁ガカヘルワ ソラヨトコロデ ユキアフタ コトツケラレテヤラウカヨ
コレハヨイトコロデ ちょっまちの名 ソラヨトテ 北ホノ方ヘユクギヤガ
乃ハアノヤウニ

かりがねをきゝてよめる

元行内親王

春ごとにたがうなづきをかけてしも花のたよりにあくやつてはほ

○春ニナッタレバ アレ雁ガカヘルワ ソラヨトテ 北ホノ方ヘユクギヤガ
コレハヨイトコロデ ユキアフタ コトツケラレテヤラウカヨ

かりがねをよめる

侍従

春ごとに花をたづねてきたれどもあかぬ心は我のみぞうき

○オッ、ケ花ガサクギヤニヤア ムヤミニ来ノ度ノタツタノヨウニ云ステイヌルアノ乃ハ
花ト云モノ、昔カラナイ里ニスミナレタヲカイ ソレデ花ノ面白イコトヲシラヌデカ

ナアラウ　餘材・花ちき里の徒ごろー。

　　見志てば　　よみ人しらず

をりつるバ袖こそ匂へうめの花たれかはるとも思ほえなむ

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ　ソレデ袖ガニホフカシテ　ソレガ来テ鳴ク　折はつるし

ト袖ノニホフヲ　梅ノ花ガコニアルトヨフカシテ　ソレガ来テ鳴ク　折はつるし

色よりもかをこそ花とおもふめれさらば袖もしさらば袖もしてやどの梅ぞと

○梅ノ花ハ色モヨイガ　色ヨリ香ガサ　ナホヨイワイ　ア、ハレヨイニホヒヂヤ　ムヤウ

ニヨイニホヒノスルハ　タレガ袖ヲフレタ此ヲノ梅ノ花ゾイ　ア

色ごとにかく梅乃なうるしごとにかぐはしきかもうるしごとにかぐはしきかも

○ムヤクチニヂヤニ　ヲノ近イ所ニ梅ハウエテイゾ　花ガサケバ　トリヨウ匂ウデ　待ツ人

ハ来モセヌニ　ソノ人ノ袖ノホヒニトリチガヘラレルワイ　○千秋云、折つるバ・花のうちごとにかぐはしきかも・花のうちごとにかぐはしきかもなどいふべし。

梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホドノコトヲ　ヤウニサ　袖ガ香ニソマツタワイ　キツイ匂ヒヂヤモノヂヤ

○梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホドノコトヲ　ヤウニサ　袖ガ香ニソマツタワイ　キツイ匂ヒヂヤモノヂヤ

うめの花をり〳〵よめる　素三條

梅の花折てかざしてよめる　素三條

ふる雪の白髪までにかくる迄折てかざしつ花かくる迄

○ソウタイ笠ハツスリヤカホヲカクス物ナレバ　皆ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヲヨツテ　ツムリ〳〵サシテユクヤウ

吾ガ年ヨリタケ形ガカクレカドウヂヤト

　　素性法師

ふるさとの梅の花ゆゑ春風はわれをとばずて香をぞ尋ぬる

○九九

○一ノ裏一

○オレハアハウナ今ヤデハ 梅ノ花ヲタズネヨソニバッカリサアソンデカナト
思フテ見テ居タガ 梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ 折テカウ近ウ見テノ
ギヤワイノ久ヽヨソニヲタヤウナコデハナイ 能材ヲ
梅ならで人ノおもはぬ
春ぢゃで白ふくんを梅ならで人ノおもはぬ
○此梅花ヲ 半枝テナウテハ 誰ニ見セウソイ 色デモ香デモ ヨウ知テ居
ル人ガサヨミアヽハヨウシリテスソヲヨミラヌ人ニ見セテハナノ甲斐モナイコサ
ヽヽ ほゝ ○ ○ ○

○春ノ夜ノ闇（ヤミ）ト云モノハワケタヽヌ物チヤ　ナゼド云ヽ梅ノ花ガ暗（クラ）ウテ色コソ見エ子　香ガカクレルカ　香ハナホクラウテモ限（カギ）リハセヌ　色ハ限レテ香ハカクレヌレバ限レルデモナシ限レヌデモナレドチラモワケタヽヌ又閑（シヅ）チヤハサテ

ヽヘタヽ長谷ヘ一ヽキル　タビニ

そうをふかうづくしに谷（タニ）とりぎる人のもふ〳〵くやどベニキナリノハチニタ久シデリデソイヘシイクワイシバリソイヘアキイニガエウスニハハヤドハコヽノらでほどくへく後ふりそめしもふりそめしものうるしかくさトホリニサヽヘカタノ一ヽデアヒカハラズシカリトアルヤトロ上ヽテトヽニテタシニテゴザレバソコニサイ

ぬるふかむやうりハおろしよあるテアル

そうでもある梅むそアヽてよう人をいざなふ（ヽ）ほどもまつ〳〵ほひけ風

○人ハドウ（イ）チヤヤラ　心モカラヌカカツタガ言（サ）ヌガ十ニミノ所ハ　梅ノ花ガサ　ワガ来タレバ　コレヤウニ一ヽヘカタノトホリ白ヒニアヒカハラズ　ニホウワイノ

春おしふ流（ニ）レテイク川ヽ　花ノ影ノリツイタノヲ　アノ水ノ中ニモ花ガアルトヲヽテハイソ

春テモ　ダヽサレテ　折ラレモせヌニ　ヲラウトテハソノ水デ袖ガヌレル（ン）ガ　今年モ又ヌレルデカナアラウ（ん）

詞云ふめどもこゝに梅ありきりをふるとも見ゆ

うぐひすのかゞみにうつるかげをしみ花ちるとてやなきわたるらん

○年ヲヽヲヽテ　毎年春ハ花ノ影ガウツリテ　ヽ花ノ境ニナル水ハ花ノチリ

カ、ルノヲ　袖ガクモルー云デアラウカ　其ノチリカルト云ト　年ヲ経ヘテ塵ガ

カ、ルト云ト　泪ガ同シーチヤニヨツテカウヨンダノヂヤソヨ　○ヨ秋云ゾーヲ

用ヲスルヲ、ク、袖ノ事ヲヘテ、ソウヨンダノヂヤソヨ　泪ハ上ノ白ヨリシテ

俳諧ハ、ヤリ、ベキヲ、ホンニ、ソウヨンダヨリ、ソレガヨイ

イヘノ女ニ

あれくをそ梅の花のちりをとよそを

夏うく

○日ガクレルト云テハヱ　夜ガアケルト云テハヲヌ　此梅ノ花ハ　イツノ上ニ　ソヤウニ　チツテ　ニヘウタテヤラ

○ヨ秋云ゾ初句ノ二ツノ、ハ、ソノ

ヨリ、興アリ、ハアレド

ヨミ人ヲ　シラズ

梅ヨリヲ神ヲ引テトヾメテヲ花（旧）

○梅ノニホヒヲ　袖ヘウツシテトヲテオケタラバ　春ハヨソヘテニヘウタトヲテモ　ソレガ春ノ形ヲデアラウニ

素性法師

ちらまくをしくてうつせるものゆゑに

○ハア散タワトバカリヲテソノニデアラウケヂヤニ　ヨリテヨヲヤ　白ガ袖ヘノ

コツタ　コレデドウモ袂ヲ梅ノ花ノコガワスレラレヌ

よこびとしらず

ちりぬるをわがやどの梅を見つゝは

○梅ノ花ヨ　チツタリヒ　サメテハ香ヲナリトモノコシテオケ　ソレヲ後ニ云ニイト

○廿二

○廿一

キ〳〵ノ思ヒダニサニセウ

人ノ為ニウキ〳〵桜ノ花ヲ折ラセヨ

ヲラセテヨ

ホ〳〵ヨシ去年ヨリモ今年ノ花ハ多ク咲ケルゾ

○春ハサク物ヂヤト云ヒヲ外ノ桜ニナラウテ今年カラ始メテ咲イタ桜ノ花ヨ　ドウゾチルト云ヒヲヘバ　ホカノ桜ニナラハヌガヨイゾヨ

散レ〳〵

山ヂニ人モヲラヌ先ニチリ〳〵ニナレ桜ノ花ヨ

よみ人もし〳〵

○山カ高サニヨツテ誰モ来テ見ル人モナイ此桜ノ花ヨ　人ガ賞翫スルヨウニ咲イテヤラウホドニ

クワンモヌーテ　アヽリウラウ〳〵ウライ　オレガ見ハヤシテヤラウホドニ

又ヲ里トヲイ人モヲラヌ山ザト〳〵

ぶさ〳〵ト咲ガヲホイ桜ノ花ヨ　ソレガヲマヘノ為ニハ　露ガ一メンニドコモカモ立テカクシテ花ヲ

○山ノ桜ヲ　オレガカウ見ニクレバ　露ガ一メンニドコモカモ立テカクシテ花ヲ

ムセヌワイ　サテモイチノワルイ露カナ

深度石乃おま人ら〳〵花が先ふ桜のなをバ世ぬ人

ふとゝゝてよろ

年物もバよりひともおいぬ志うハあるもどなをし〳〵もバ地ひもあし

○手折ラバヲラヘテヲレバ　ワガ三モイカウ手ハヨリマシタガ　サリナガラ　アナタノ仕業ニ

昌ナサレ、式部殿デ　カヤウニ花ヲ見テヲレバ　ナンモ物思ヒモゴザリマセヌ

なつぎさの花少しちり〳〵ぬ志ろひもの

○イツク世中ニトテト桜ト云物ガアレデ ムヤウニイロ〳〵ト心ガサワツイテ ナニモノドカニオモハヌ

ラウニ 桜ト云物ガナイナラバ ケツク春ノ心ハ ノドカニア

ルベキヲ

ナニ〳〵ゾ

よみ人しらず

○岩ノ又ヨリハシル水早イ川ガナケレバヨイニ ソレヲ内ニ居テ 工見ヌ人ノタメニ

アノ川ノアチラナ 桜ノ枝ヲ折テキテアア ミヤゲニ持テイナウモノヲ

川ガアルデドウモヨリニイカレヌ

山乃さと

○カウシテアノヤウナ 桜ヲヨウヘテ ヘ人タヽ嘲スバカリデオカウ〳〵カイ

ソレデハヘタカヒガナイホドニ キニテ折ヲ来テ持テイテ 内ヘミヤゲニセウ

死ざかりふる雪ゆへに

ヘやまとごゝろ見ゑまし

ヘ宿をバ柳 さくらをこゝまぜてみやこ

○此山ノ上カラカウヘ流せバ 柳ノ青イ色ト 桜ノ白イ色ト ヨコヂセテ

トシト錦トヘエル ハヘワタシタトヨノ人ノ京ノケシキガサ 春ノ錦トユモノヂヤワイ

ちくれ雪のもし消てとそ

きのとものり

○未熟

色もうつろふ同じむらさくらめど年ゆく人ぞかぎりなりける

○此四

○梅ハアノヤウニ色モ香モ イツノ年モ同シ-テ昔ノトホリニサクケレド年
ヲ経タ人ハサコソトホリニ若イ時トハ大キニカハツタワイ いさの三の夕ちく
らなどゝいひてハいさしらかつらひがく紀ちりかを梅をそちい
まむとてまひくりとはの四 よ秋云ひくめどハ君ふきけれどもとうさ
くうれどくうそとハうぬひでさきうめ
をそちう ちゝゆきて
毎日ゝかとそんてをりつるそら尽えうそらむ山のさくらを
○此梅ノアリタル山ハ サダメテ雪ガ立テカクミテ 知レニヲカラカニ 一タレカ
ニアタニダヘテイテ折テキタラーブ
うなれをおわせ〳〵終しはふよみくもてまつる
梅を咲ふるゝ〳〵もゝ〳〵ぴきの山のひもりえゆるもら雲

○桜ヲモサイタサウナワイニア ノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ又エルハ
空モヨキハキミノ玉ヲ今ヤ今 花ノ色
みよ〳〵ま山べ〳〵ち雪ノ梅花雪ヲ
○吉野山ノアタリニ咲テアル桜花ヲ見レバ トシトッ雪ヂヤナイカトトリ
チガヘラレルワイ
やまひとうふ月はなかいせ
ちくまをくそ経る年ぶりも人のこゝろかはりをやそをぬ
○梅花ヨ イツモノ年ハ早ウイル処 サノテ春ノ一月カハツテ長イ今年バカリナリ処
人心ニタトヘノウスルホドユルリ〳〵ヌテアルタガヨイニ ナゼニイツモト同シヤウニ今年モ

早ウチルゾイ　此枝白のてふを一枝、例多し。何のをか出せるぞ
ぢゃし。おせ。いひざ曲あゝくて、いうかることとゝきてとりがてゝし」
さゝ〳〵折れ乃ちうと
ア手まるゝ　ちみくゝらん
いうぞなりとゝふてゝあてき梅を奉れるくゝまちもろ
○桜花ハアダナ物ヂヤト　名ニコソ名ヲテアレ　ナカ〳〵アダナ物デハゴザラヌ　「年ノ
内ニモタヾ〳〵ナラデハ　名ヲテトサレヌ人ヲサヘ　キドクニ今日デチラズニ待テ居タ
ワイノ　スヒヤ久シウ名ヲテトサレヌ梅ノアダナ心ヨリハ　梅ガハルカマシヂヤ
　　好ゝ折れ〳〵折れ
この〳〵し
まふこぞ（ば）ハ白ハ雪とぞ（ば）ハ梅とこそ（ば）ハ消を（ば）ハ名残とこそ（ば）ハ。や

○サテハ　梅ハアダニハナイ　兼平ヲアダナト云ハシヤルガ　ソレヤ大キナチガヒヂヤ
ワレガ今日ハ未ウタレバコソ　アノ梅ヲ折ヂヤトハヘレ　モシ今日未ラズバ明日ハ
モウ雪ニナツテ降テシマウデアラウ　タトヒソノ雪ニナツタノガ　消ズニハアツタトテモ
雪ヂヤトコソヘヤウケレ　モトノ花トハヘヤウカヤ
　　折〳〵折
ちるとぬるとばかりふるとて雪ゝ折きおをりてそ
○梅花ハチウテニウテカラハ　ナニホドクウ処フテモ　ソクセンハナイモノヲ　折ルナラ
早ウ今日ノ内ニコソ折ウナレ　明日ハモウチルデアラウ
をりとゝバをゝぶもりうち梅ならいざやどかりてちるまでハえもむ
○此梅ガアヽリヽヤウサニ一枝折テヘヤウカト思ヘド　折テ取ルハ　イカニシテモヽアヽ

惜イヤウナ物カナ　サテ〳〵ナゴヤせウブイヤ〳〵折ルハ惜イコヂヤニ　ドレヤ木ノ下デ　宿ヲカリテ居テ　散ルニデハアルマイ

きれありをと

桜色にさうとハ始ノ〳〵浮てきむ花ハオヅ〳〵ケ変テシマウデアラウソノ後ノ形ヲニキル物ヲ桜色ニコウ染テ着ヤウヅ　○千枚ニ咲さくら桜色ニそめぬる染をいつハかりしも。

さてこれなりさけうしきるうできるうよりみつる　みつる

其ま花ガテラ〳〵ナレバ　花ガチッタラモウ

○コチノ様ヲ見ガテラニ咲さテクル人ハ其ま花ガテラ〳〵ナレバ　花ガチッタラモウ来ハスマイチヤニヨッテ　変テシマウタ後ニサ其人ガ恋シカラウ

其子流のうつる今のはなうつるうつる

伊勢

見る人も有きふるさと山ざくらはなばかりこそ春ハしりけれ　注

○本テ見ル人モナイ山里ノ桜花ハ　ヨソホカノ花ガニテシマウテ後ニサ　サカウコトヂヤニ　今ハドコニテモ沢山ニ花ハアルヂヤニヨッテ　ソレデ遠イ山里ナドヘハ誰モ人ニクル人モナイヂヤガ　ホカノ所ノ花ガモウ〳〵サイシブンニナッテカラ咲タライヤトモ遠イ所デモ人ニクルデアラウサ

春歌下

題しらず

よみ人しらず

○春ガソコラヲアラソヒテ咲ク花ノ中ニアラデヤ人ノ心ノ見エムトスラン

○春ガタナビイテ　ソコ春ヘ色ノウツリテ見エル山ノ桜ガ　チラウトテヤラ春ノ色ガカハッテ　ゆく　キタメ

○チリカヽッタ桜ニ向テ　シバラク手ラ　休メテ　ソレデモシバラクモ　待テクレトネガヲ入レテ　ソレデモシバラクモ　チラズニ眼ル物ナラ　何ヲ桜ヨリ　トサッタ物ハアルマイ　惜イノニ早ウチルバッカリガ　アッタラ桜ノキズヂヤ

○ワルウナウテウヅクト　ソッテアノ中ニソノ花ヲトラレヌ　ウノガサアノ、クッカウナイヂヤ桜ヲモラヒニヤラウヨリ　サッスリトゆリナシニ早ウ変テシマヘ　ウアレバカナラズシマイクチガワルイ物ナレバサ

○コヨヒハ此里デトマラウイヂヤ桜ノ花ハ　世中ト云モノハ　ソウタイ何デモ　長イヌルイラバ思ヒダサズニサ　ムサウニオモシロイ桜ノ花ノチルヽギレニ向ヘ　うつもれ　ソレモ　ヨカラウ

○桜ナハサ　咲ダケワトヨラタウチ二　ハヤカタ一方カラ変テシマウタラワイ　人間ノ一生ノアヒダハナニノモナイ物ヂヤガ　フレニマアヨウ似タ（ニ）カナ

侍臣遍照ノ坊ニ参テ花ヲ見ル

桜ヲ尋ネテ山ノ奥ニ入ル人ノ有トモ知ラバ我モ行ミム

○遍照ノ坊ガ大方此花ヲ見ニ来テクレラルヽデアラウト思ヲテ毎日〳〵マテドモ〳〵ケフ〳〵デアラウト思ヲテ

桜ヲ見ヨチルナヲ桜手ニ受テ千年ヘヨト云ヘバ

モロ共ニ　カヤウニヨミ入故ニ目ニカケテ見上

桜花ヲ折テ人ニ贈ル歌ノ中ニ

桜ヲ尋ネ来ノミソ春霞立ヲ隔テヽ人モ待ラム　兼均

桜花ノチル所ヘキテ人ニ時ヲ問ハヾ春デアリナガラ　雪ガサヽラ〳〵トフツテ、ギニハキエニクイ　雪ノ言ハソノ、消ル物ヂヤニ　コレハ正ノ雪デナイ桜ヂヤニヨツテナ。ゐ秋き。初ニ白ハざそ〳〵ろ。ものうとうそ。ふをゝちるをゝ。さハりひかくき方ふをゝちるをゝ下上ニハつるゝ

桜ノ花乃ちり侍ラム所ニテ人ニ問ハヾ

そらもいろなし

ふちゝ〳〵風のやどりハ心もとなきまで〳〵よもきて昭む

○サテモ〳〵アノタラ　花ヲ折ヤウニチラス風ガ逗留シテ居ル所ハ　タレヅ知テ居ル者ガアラウ　誰ガ知テ居ルヂオレニ教ヘテクレイ　ソコヘ行テ　ゾンブンニ　眼ミライハウ

うちつけに今もこむとは桜花風のまにまに人ハ知らじな

いざ〳〵ゝと扨もちりやむ一さうの形ぺ人よう〳〵ゝもの

○此ヤウニ梅ノ早ウ咲テシマウハアレヨ〳〵ゝト料簡ギヤ　ドレヤ梅ヨ　オレモ
イツシヨニ咲テドウナリ所ナツテシマハウ　人トヽ云物モ一サカリ盛リナ時ガ
有テソレガスデオト又タチヲバ老ガテラウニモナイヤウスヲ人ニラレルデアラウホド二
ひとまわりもふ人のようでできてかへりにくい法ぢやよ
てなふさつてゝくらす　ほゝゝゝ

一ぺんふさ〳〵ゝ見もやらるゝとちりく〳〵ゝ気ぶせもちらさてちらばちり〳〵ゝゝむ

○此ヲ千両ト云テイナセヤツタ人ガ　又ゴザルカト　今日一日ハアヲ待テミテ
ソシテゴザラズバ　チルナラチツタヨイ　梅モヨ　大タヽ今月ハゴザリサウナ物ヂヤ

山のちくてゝ御ふさとよめ

春庭あふかゝるもしむさゝゝゝ

待タ桜モ ハヤムヤウニ ウツロウテシ
東宮の雅院みてさそ
なぐれりをつそてよめる
枝よりもつぐふちりぬしなれば
○水ノ上ヘチツテ流レル桜花ガアレトツトト涕ノヤウニ見エル 枝カラモモロウテタ
ゐ千ヤニヨツテ 下ヘ落テモ又同クアノヤウニモロイ水ノ沫ニサナルヂヤワ
桜のゐちりをよめる
おぐらやまみねのさくらこころあらば今もう一度みゆきまつ
○トテモキレヤウニ早ウチルノヲ井ナラバ一向ニヨテカラ サガヌガヨイニ ナゼニ井カズニハ
井ヌノ桜ゐハハヤウニ早ウ散テハ又テ居ルヲデカ心ガサワグトシテオイツカヌ

あはゆきのごとくにさける桜花ちりかひくもるはるの山かぜ
を以てよめるなり。例を考へ合せて味ふべし。
桜のごとくちりぬるをともあるが
ちるてふ花とくちるなともあるが、ちるてふ花とくちるなとも
○オレハ桜花ハ早ウチル物ヂヤ尼ゐハヒヌ ソレヨリハ人心ガサアダナモノヂヤ
ナゼトユニ 桜ハニダ風ガフカヌバメツタニチリモセヌガ 人心ハ風ノ吹ニデモ
タヾス早ウウツル物ヂヤワサテ
飽材ト白の泡ろ
ちてこの花のちるぬよあるきみなのり
むさかりのひろしのごをれまの日ふ
○日ノ光リノドカナユルリトシタ春ノ長ヒヂヤニ ドウモデ花ハ此ヤウニ

サワ〳〵ト心セワ・ヒワチルコトヤラ
春(ハル)ヲ待(マ)チ兼(カネ)テ咲(サ)イタ花(ハナ)ノ散(チ)ルヲ
残(ノコ)ヨウニ
残(ノコ)ラヌ
春風(ハルカゼ)ハ物(モノ)ノアハレヲヨクシテ存(ゾン)ジ
○春風ハ花ノ咲テアルヲヨケテフケ モシ風ハフカイデモ 花ハ必
ブンノ心カラヒトリデニモチルモノカト タノミテアルヤウニ
サキ〳〵ノ ソノ花ヲヨク
ソノ花(ハナ)ノ咲(サ)ク所(トコロ)ヲ吹(フ)キ
○サクラ花ハ ヒトリデニモ ヒタスラ(ノコ)
以上 ドノヤウニチレトユーデ風ハフクヤラ

ソノ花ノ散(チ)リテカラ下(シタ)ヘ
ソノ花ノ散リテカラ下ヘ
○アノ桜ノアル所ヘ行テ折タカツタケレ共 山カ高サニエノボライデ
ソノ念ナガラオレハヨソニアイ〳〵来タニ 風ハアノ桜ヲ心ニカケニスルデ
アラウト思ヒ
折(オ)ラレヌ 折(オ)ラレヌ 折(オ)ラレヌ
春風(ハルカゼ)ノ ソノ花(ハナ)ヲ
○桜ノチルヲ惜マヌ人ハナケレバ 此ヤウニ吹ク春風ノフルハ 世ノ人
ノ桜ヲヨロコンデ咲ノナニヨリノカイ

亭子院の会はてゝ　はつゆき

桜をもちゝぬる風のなごりゆゑ花ちるまがきこそふれ白雪

○桜ノチル時ニ風ガ吹タテ、其花ガヒラ〳〵ト散ルヲ雪ニナゾラヘテ海ベニナゴリト云コトガアル其ナゴリハ浪ガタツケシキヂヤ　ソレテ海ベニナゴリト云コトガアル

花ヲチラス此風ノアトノナゴリハ　ミノアリモセヌ中ニサ浪ガタツワイ

なごりおみなへしのみやこふるさとの色はうつろひぬ秋の夕風

○フルイ昔の都ニナツテシマウタ叶奈良ノ京ニモ　ヤツハリ色ハ昔ニカハラズ都デアツタ時ノトホリニ　花ハサイタワイ

まのゝ〳〵てふてふあらそふ春の野はおもふ心のほかの色かは

○花ノ色ヲバ　花ノ中ニヨメテオイテアレセバヒ　セメテソノ香ヲナリトモ　霞ノ中カラヌスミダシテキテ　コヽヘモニホヘセイ　春ノアノ山ノ風ヨコヤ　系性法師

霞衣きえのあけぼのうちなびきまつ色ふかき春の山風

花の本はいまはかりとぞ思ふらんまつ色ふかき春の山風

○花ノ咲ク木モ　モウ今カラハ　ホツテキテウエイ　春デレバ花ガサイテ早ウウロウ色ヲアラウテ人ノ心モウツロヒヤスウナルワイ

ちりぬとてうらみしものを桜花またきの春はなほまちぞする

○春ノ色ハドコモカモヒラ〳〵イナレバ　イキワタリ多里トイキワタラヌ里トノ

ワケヘダテハアルマイニ　ドウゾマーデ　花ハ咲タ取トサカヌ取トガアルマーヤラ
　まちけるとてよめる　つゝゆき
三輪山をしかくかくしつるまきもく人よしもあらむ花やちらくらむ
○サテモ〳〵三輪山ハキツウカスンダ　花ガアルカヤラヌ
ニハ人ニシラサヌ　ナイシヨウリ
うつゝなきみのみとけもしふ花をふきこす山のあらし
つゝまかりて後よめる　そせい
いさゝめをまの山べよ俗ニアラむ　もの法ハ
○ドレヤケフハ日ノクレルニデモ　いまノ山ベヲカケアルイテアソバウゾ　日ガクレ
トテモ　花ノ陰ガ千サウナカイ　イクラモ花ノ陰ガアレバ　モ三春タテラ　サイハヒヂヤ

花ゆゑにとこしなへにあらなくにうつろふころの人をこそおもへ　よみ人しらず
いつまでとしらぬ花乃うつろふをいとゞ心のあくがるゝかな　ふんや
○花ガチラズバ　イツマデイサセモ二心ガウカレテ居ルデアラウ　モシ花
ガチラズニアリツクラバ　千年デモ此ヤウニ只ヲ見テヲリタイヤウニ思ハレル
　　よみ人しらず
春ごとに花のたえまのあらましかばもの思ひなしにくからまし
○花ハ今年　チツテモ　又来年カラ後モ　春ゴトニ盛リハアラウケレドモ
ソノ盛リニヲテアルヲ　ユヒノ命次第ヂヤワイ　ナニボ花盛ガ毎年ア

ツテモ 今ガナケレヤ又トアルマイ ハナラヌ サウ云ヘバアヽ ヨリ多イ花デヤ
花のおし盛のうちに形ばかりぶるまひ
○花ハチツテ ニヽウテモ 又春ニナレバ年ヽお客ラズ定ツテ咲ノ物デヤガ
世ノ中ガ花ノトホリニ定ニツテカハラヌ物ナラバ ヨレテキク昔モ又アタヽ
カヘツテクルデアラウニサ 世ノ中ハヨタ昔ガヲタ、ビカヘルトヨイハナイ
吹風をうらめしくおもふ人もこそあれ
○吹テクル風ニ礼ニディヒツテアルモノナラ、物ナラ 此花一本ハヨケテ吹テクレトイフ
ニ サツヨニハナラヌモノナレヤ ドウモ散テモセウガナイ
まち人もこぬものゆゑふる雪に花をやさしてまつらん
○此花ヲ馳走ニ折テ出テオイテ 本タナラバ見セウト云ウテ 待人モ来モセヌニ
アヽ鶯ノオモシロウ鳴テ井タアツクラ花ノ枝ヲオレハ折タワイ サテモヲ
ニイコトヲシタヽカナ 待人ガ来ヌクラ井ナラ折ラヌバヨカツタニ
こぬ人のうらみはてなばちりぬともたれゆゑかはるさくらとおもはん
○ヨニ春サク花ハイロヽアルガ何ノ花デモ皆アダナ物ナドヽレデモ誰レガ
春ノ花ハアダナトヨヽトニトヽルガキツタ者ガアルゾアダナ物デヤヽトハ誰モ
イヒツケバ又ヤツパリ賞翫スルデヤ 俳諧ノ後をつゞしめ
ちる花のうきをさそふ水あらばいざ山の井のかげもみん
○夜ノ色ガイロヽニ見エル人ヲ夜ノ内ニ花ノ色ガ変ヘ

かそこもあれまそれ山へそとをれる風
○寒ノ立デアル春ノコロノ山ハ遠ウ見エルケレド カクベツ遠ウモナイカ
ニテ吹テクル風ハ花ノ白ガサスル 比ろ折をふくらかし
うつろふをそこそこもさへみぞうつりきる色かいでとてそこを
○ウツロウタ花ヲクレバ アヽヨイ色ニウツクタワイ 比ヤウニ花ノ色ニウツリタ心ヲ ドウゾ形イロニハタス
ヤイ人ガ知ラウモシレヌホドニ 人ガ知テハアヽリアハウラシイワイヂヤ

ホはよろし 能材よろし
紅もよし
うぐひすもなくべくふきそてそこをれる
○ヨウナク野ヘ来テクレバ ドコノ山ヘでもふきそてそこをれる
イ ヨウガ惜ガツテナク人ダウリ共ヤ 。ふ秋ニ二の白のぎくふしと黄ハ下の色へかけて
空風をなくきてうぐひすみよくぐひすハうれやい花ふすぐふぬもとく
○ヨウガオレガテカクヨまテ恨メシサウニ鳴クガ ソチハ花ノ手ガ惜ウテノ恨ミルナラ
アノ吹テクル風ヲ恨デナケサ オレガアノ花ニテヨツトナリ(ごと)ニ手ドモフレクチラコン
オレヲ恨ミヤウケレ オレハ手モフレハセヌゾヨ スイヤコチガ(ナンデスヤヨ)知クコデハナイワサテ
典侍治子朝臣

ちくさのおくふかくもあるかなやそ

○夜テユク花ガ惜シテ泣ノテチラズニトゞル物ナラコチモ雪ニオトロウカイ

ナンボ泣テモ花ハドウモトマラヌワイノ

仁和の中将乃みやすん所はおふの合せしてうつる

りくらふみきく　後京後法

花乃ちるおとやまびきの心ちこそひさの春乃

○夜ノタツテアルアノ五田山ニ雪ノナク声ガスルガ　花ノチルノガツラウ

ハンテアノヤウニ鳴クカイ

うぐひすのおとをきゝつゝなをふかせしてうつる

あづまそおのゞねぶりもちくなをふかせしてうつる

○雪ガアノヤウニ花ノ枝ヲアチラヘコチラヘ　自分ノ明ノアラチノ風テ花ハナルモノヲ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ　ソレヲ誰レガ智ニシテアヤウニ恨ノヒサウニ　ニキリニ物ガチラスカナンゾノヤウニヤア　。千秋云、コヽラハ物のききとるれバニキリニ

ちるとてきゝ祢をとなくうぐひすのこちらなびらるくふ

○雪ノイロニモナイ鳴キゴトカナ　今年バカリチル花デハナイ　イツノ年トテモツヒニ雪ノチクデ花ガチラズニアツタト云ヿハナイニ

ふみくもらしび

うぐひすのこゑいざふゆをこゑぬまゝハきとのこゑをなかちくそ

○ダレカサソヒアハセテ 馬ヲヒイリナラベテ打ツレテ ドレヤ見ニユカウゾ 此ヲ下ノ京ハサゾヤ 雪ノフルヤウニサ ヒクヒクト花ハチルデアラウワイ

ちるおもをなふうらうらみむ 芝中ふあもとふりむはうは

○花ノチツテユクヲ 行ノ限メシウ只ハウゾ コチガ身トテモ イツヤデモ 此世ニカウシテアラウモノカイ 花ト同ジヤウニ オツ〳〵ケ死ンデユク物ヂヤ 花バカリヲ早ウチルトテ限ミヤウヤウハナイ

在まれ色ハうつりふりうれいづ〳〵にこが身よふ小野ノ小町

○エエ〳〵花ノ色ハアレモウウツロウテシヤウタワイナウ 一度モ人ズニサ ワシハワレソフテ居ル男ニツイテ 心苦ナヨガアッテ 行ノトンヂヤクモナカッタアヒダニ

長雨ガフッタリナドシテ ツイ花ハアノヤウニマア

学ふふ〳〵しい男女のかよひのことを、せとと云中ともいふ多い、此条も此意なるべし、源氏物語ふぢ

仁和乃中将のみやもん

ろ日ふよをそ

をしと思ふ人をおきてふうれるむちよ茶ごふぬきてとぐみて

○散テユク花ヲヨシトヨ心ハドウゾ糸ニヨラル、物ナラヨイニ ソシタラソノチル花ヲ一ツ〳〵 其糸デツナイデ

ちぐれ山でそふ女乃物句

○巻第一

あづさ弓春たちぬれば山ぢ近みうぐひすぞなく

○一春ノコロ山ヲ越テクレバ ドウモ道モヨケラレヌホド 花ガチツテ

クルワイ アノ女等ガサ

宮ニヨク附きさいのてふ合のこと

春のきたてるかすみをぬふとてやこぬ人のそでのほつれぬ

○此春ノ出デ若菜ヲツマウト野ヲテ出タモノヲ アチラヘコチラヘチリ〳〵ガウ花

デワカナヲツム更ニヨク道ハ下ギレテヲラヌヨウデモナイ所ヘキタワイコレヤ

山ちかきうぐひすのねをとめてこそ人のこゝろのほどはしらるれ

○春 花ノチル時分ニ山ニトヂコメテ 雖タ夜ハ ソノ花ヲ惜イノ〳〵ト云フニヨカ

麦ノウチニモサ 花ノチルノバツカリヲカルルワイ

宮ニヨク附きさいのてふ合のこと

吹風しづかなりともちる花をたれかみ山のかげとしらまし

○フキチラス風ト 流レテユク谷川ノ水トガナイモノナラバ 三山イヨ〳〵タノシテ

咲テアル花ヲバ ソレヤウモノカイ スレバ風ヤ川ノ水モ 花ヲ

メニ メツタニワルイコトバカリデモナイモノヂヤ

志賀のあまのかつきするみるめをもとの花山ゆきてこそとへ

春の花乃もゆふ立をしのぎてもおもひたえせぬ色ぞ見えける

よそふえてかへらむ人はぬぎつるる花ひもそれよ枝もそこも

○チヨツト立ヨツクバカリデ足モ留メスニ　ヨソニテイヌル人ニ　ハヒツウテイナスナ夜ノ花ヨ　タトヒ枝ハ折レルトモ　ドウゾハヒツウテトノヨ

あかり障子の笠ばりをやぶる人のもちものにくし

見つ稼

永屋やふるやのつまどを立ちながらみつるをよそに

○コチノ在ニ咲テアル夜ノ花ヲアノヤウニ人ガヒツカヘシテ　ドウモナイステヽイナレヌヤウニ　ヒタスラ見ルガ　ドウニカシテヤラン　エイ在デモナイニ

見てらばよそ人ながらも

いまとかもちりきまがふもちづきの小路のさくら乃山吹の花

○タチバナノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハ　ケフコノゴロカナスノニサイタテアラウ初ゑとハ二つとふやとめ特出して入れしやうに。

○此五山吹ノ花ハイ　春雨ニヌレテ一入サツタ色モドウモイヘヌニ　色バカリデナシニ　香ニデガ　雨ニヌレテハ別シテ　ニホラレウニホウ

まを急ぎ給ふ人なつかしや山ぬきみちを

山吹ハウケノタヽヌ物ヂヤ　コヽナラサカヌガヨイ　花カ咲タラ見ニ来ウト思テ植テオカシヤンセ　其方ガコヨヒニエモせヌニ　咲テモ何ノ

センモナイコヂヤ　ソレグラヰナラ　ソレデハ　タカヒダアツテワケノ分ラヌモノヂヤニ　名のみなり

ようの川乃ほとりふかき

吉野にきてやわが恋風の

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見ヱバ風ガ吹テチルガ　ソノ風デ川ノ水ガウゴクニヨツテ　底ヘウツツタ影デガチツタワイ

新しらべ

かくばかり

○一　井手ヲ山吹ガハヤモウ散テシマウワイ　アヽ残念ナコトヲシタ

ソツト早ウ　花ノサカリノ時分ニ来ヤウデアツタモノ

此ハヒトリ人のいもくるものきよしぐうぐう

まつてゐやせい

○ソンデウツコヘイクトテ定ツタ旅デハ　ヨソニトマルノハウイ物ヂヤガ　サウイフ定ツタ旅デハナシ　心ノアタヽマルニデアソデイキガリニドツテ「日日ノ旅ハアタヽカイモノヂヤ　ソレデハオモシロイ旅麻

デアラウ　サヽなど下白のをとりくみ

まつのとくる屋をとりくみ

あづさゆみ

○五十一

○圭堂一

○古ヘニ梓弓春トツゞケテヨミテアルガ マコトニ三月日カ早ウタツテ矢ヲ
イルヤウニ思ハルヽ 春ニナツテカラマダチンノヽモナイニ サテモ早ウタツタカナ
ト一月ヒトヨ経ツカ経ヌカノ年ノ寄ノ内ヲヨンデヨマレタ
ノヲミテハ此頃イヅレモ〳〵ミナ〳〵ヨキ
ヤウニヨミナシヲルヲミレバ
〳〵ゆき
たれとなく春とおぼえてしらゆきの
○ナンボ惜ンデモ〳〵花ハ手ヲ
コレデハセンナイコヂヤトヨツテ 昔モ今モ二六時キーモナウ
アリソヲコ二思ハレル ソレデスンデウナヌチヤヽデ 飽材ヨウ〳〵

やしほのつゞきりか〳〵ふ山をなど
けおゞろ〳〵ふ山ゆく人ハ姓を
いくで又ハふしなのゝぶを
もちゝゝゝのまふ〳〵とそれ
○花ノ夜テ 流レル川スヂニソウテ
レバ山ニハモウ花ハミナチツテレヽウテ ハヤ春モナイヤウニナツタワイ
春ハ惜ムケレヒ モウ三月せン上リハせヌ 春ハモウタヽテイヌル道ヘ旅ダチシタル

バトニラヌハズヂヤ　庭ハ〻ノ御ようすも、話ぐさにもちぬ
きびとりよさそうにて、ゆかしうこそ、又いでていふ何を、
そへていつる仰つきふ多ゐ一ツ、ゆへをとゝもにそのゆへしる侍ふべし
　　おきく風
　　宛字書きその字おもふ合のち　おもふにまかせぬ
多くもえぞなけやうぐひすて一ツやふ二ツ
○春ハ一年ノ内ニ一ツ多キモ来レバ主刻ニ一ツ多キ理ナリ　前漢廿三月山居詩
春ヂヤニクレテユクハサテ〳〵コリオホイコヂヤ　ゆくハ過ルノ意
恨ミヨヤイ　イカニモ鳴キドコロヂヤ
　　やよひのはじめの日花つゝじをおりて女どもを
　　みつ作
とゞむべき物とはなしふるあめにうつろふ色ぞ
○アノ花ガアマリノ惜サニ一本〳〵チツテユク花ゴトニ　コチノ心ガツイテユク
ワアノ好ニ　サテモ〳〵アホラシイ〳〵ト　ツイテイタトテトメラレヌ物
デハナイニ　おはみるごとにうつろふ物ぢの花をてゝ
　　やよひのはじめの日あめのふりけるに
　　おりそへて
人ごゝろ〳〵まで
ぬきつゝそあひてをそ折る年ごとにふきちらすらんはなのしづくを
○此頃ノ花ハドウゾコモト〳〵ト内ニカケウト存ジテ　今日ノ供ニヌレ〳〵サ
ムリニ折リニタ　春ハ〳〵ダイクカモアルデハアルマイ　モウ南幸ノ内ニハタヲ

ケフ一日ナラデハ春ハナイト存ズル在ニサ　法皇下白ノ事ヲ
亭子院ヨリ今ヨリ其ノ事ヲ御ス
ルノ事ヲ公ニ奏ジ給ヒシ時ニ
○春ヲ　モウ今日バカリデヤトハ只ハヌ時ニテサヘ　花ノトハ立テイヌルノガ
何シトモナイカサテ　ソヒテ廿ヘ花ノトハ立テサヘ
春ヂヤモノ

ソヒテみ一の巻ヲヲヘ